



山田神社拝殿の 天井絵

山田神社拝殿外観



山田神社は永禄4年(1561)に唐船城守護と村鎮守として、唐船城がある平瀬山の北裾に創建されました。文化5年(1808)に建てられた本殿は一間社流造で屋根は檜皮葺を鉄板で覆っており、昭和46年7月に町重要文化財に指定されています。今回紹介するのは、その本殿に取り付けられた拝殿の天井に描かれた絵です。

嘉永5年(1852)に拝殿が再建され、桁行3間半、梁間2間半の入母屋造で、平入に向拝がつきます。天井は格天井で、太めの角材で正方形の格子(格縁)を組み、鏡板(天井板)を嵌めたもので、寺院や城郭建築、書院建築の大広間などの天井に多く見られる格式ある造りです。天井絵はこの鏡板に描かれており、天井の中心に方位版があり、全て一枚いちまいが異なる画題です。1点ずつ画題を紹介する紙数はありませんが、干支、名所、七福神、季節の花々、麒麟や龍などの想像上の動物、瑞鳥、その他鳥類、縁起物、獣、魚などが描かれおり、全部で86枚の絵があります。



山田神社拝殿天井絵

宮司の椎谷家で発見された寄進者を書いた板によれば、この天井絵は、山谷地区の氏子たちが奉納したもので、28名が29枚を、他の59枚が氏子全員によるもので、当時は88枚あったことがわかります。2枚が欠失していますが、その理由などは記録に残っておらず判明していません。天井絵の他に大絵馬も奉納され、

さらには翌年の嘉永6年(1853)に三十六歌仙の絵馬が奉納されています。余談として、当時の社殿は、現在の一の鳥居の辺りに東向きで建っていましたが、大正8年(1919)に現在地に移築する際に、氏子たちが自分たちの集落に向けて移すことを強く望んだため、北向きとなったそうです。古来より社寺建築は南か東向きに建てられるのが普通ですが、非常に珍しい北向きの社殿です。

天井絵を描いたのは、香月洞谷という佐賀藩士で、大正9年に時の宮司であった椎谷孟保氏が著した『山田宮沿革誌』には、「……狩野派ノ画伯ニシテ鍋島氏ニ抱エラレ楠久津関員ニシテ派駐ノ間ニ於イテ右需ニ應ジテ揮毫アリタルモノナリ……」との記述があります。当時の佐賀藩では御用絵師の制度はなく、必要な時には絵心のある家臣が書いて供していたようです。洞谷は楠久津番屋の役人として楠久津に赴任していました。伊万里津と並ぶ良港であった楠久津は本藩の御船屋が置かれ、民間の船の出入りも多く、荷の取引にかかる運上銀の徴収や監視・警備の仕事に当たっていたと考えられます。狩野派の絵を描くことが出来、技量も優れていた洞谷は、伊万里近在でいくつかの絵を残しており、伊万里市山代町楠久・本光寺、同久原・吉祥寺、唐津市北波多徳須恵・常安寺で作品が確認されており、また山田神社には軸装の猩々図や大絵馬と三十六歌仙絵馬があります。

この天井絵もその時に、山田神社と氏子の強い希望で描かれたのでしょう。天井絵により殿内は荘厳な雰囲気包まれ、氏子たちは神に祈りを捧げたのです。

その後、山田神社拝殿天井絵は拝殿の雨漏りなどで絵具が剥落などしてはいますが、江戸時代末期に創作活動を行った香月洞谷の作品として、平成12年7月、町の重要文化財に指定されました。(宮崎 光明)

新発見!!

江戸時代の古文書

知行宛行状

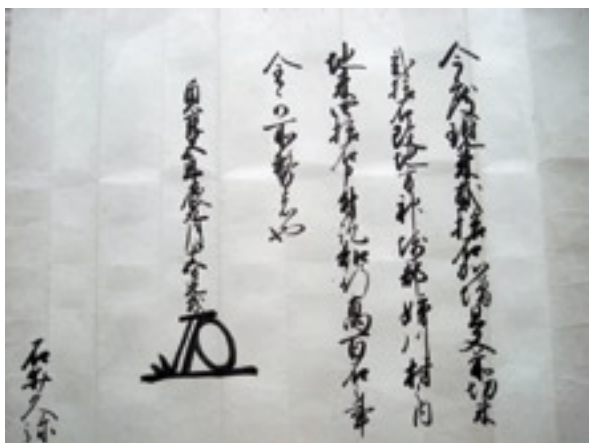
～有田・石井家文書

みなさんは今、自分がここに存在するためには、どれくらい先祖がいたか、必要だったかということを考えてみたことがありますか。

まず、自分が生まれてきたことから考えてみてください。両親である父母2人の存在があります。その父母にはそれぞれの父母が4人、さらにその上には8人の父母がいます。そうやって数えていくと、例えば、現在生きている自分から10代前、仮に一代を30年とすれば約300年前の江戸時代中ごろまでに遡るわけですが、そこには1024人の先祖が存在して、今の自分がいるということになります。これほど多くの先祖の存在があって初めて、今に命が引き継がれてきたこととなります。

そう思うと、自分の存在が自分ひとりの問題ではなく、目には見えない無数の先祖の姿が実感として感じられるのではないのでしょうか。

先祖、過去というものは自分のアイデンティティを考える上でも、重要なキーポイントでもあると思われれます。



貞享5年の知行宛行状

過日、町内在住の石井家が所蔵されている古文書について、親類である青木清高さん（外尾山）から連絡がありました。それは「古い書付があるが、それにはどうということが書いてあって、どういう意味を持つのか」という問い合わせでした。

2枚の古文書には、それぞれ二代佐賀藩主の鍋島光茂や三代藩主の鍋島綱茂の花押(判)が押されています。

す。石井家の先祖である石井久弥（享保18年・1733年没）に対して藩が米を与える命令書の「知行宛行状」で、その昇給を知らせる古文書でした。藩主の花押、現在の印鑑のようなものですが、それがあることから「判物」とも呼ばれるものです。



光茂の文書は貞享5年（1688）のもので、「20石を増し、切米（藩の蔵から与える米）20石

石井久弥の子孫、石井友規さん（右）と田中ヒサ子さん（左）

を神埼郡姉川村の地米（村から直接もらう米）

に切り替える」と書かれています。綱茂の文書には元禄12年（1699）、20石を増やし計150石とするとし、同郡横武村と同六丁牟田村の地米を10石ずつ増やすと記されています。

石井家にはこのほかにも系図が残されていて、それによると石井久弥は延宝8年（1680）、17歳で鍋島市兵衛の家来として出仕し、その後、光茂の参勤交代時には江戸詰めをしたり、帰国後は藩主の側近部局の主要役職である御近習頭などを務めています。

また、官庁職員録に相当する当時の佐賀藩侍録である「佐賀本藩着到（元禄8年）」によれば、石井久弥は物成40石、知行100石で、吉右衛門組長柄鍬物頭とあります。

佐賀県立図書館近世資料編さん室の大園隆二郎室長によれば、石井家の資料は「同じような文書は県内で約500ほど確認されてはいるが、写しではなく原本であることや神埼の歴史を伝える資料として貴重なもの」だということです。

明治維新後、石井家是有田に移住して焼き物を業としたことが伝わっています。しかし、それまで士分格の石井家がなぜ焼き物業に携わろうと思ったのかはよくわかりません。

ただ長い年月、石井家の関係者だけに伝えられてきた歴史が公開されたことで、石井家を取り巻く状況や当時の神埼の様子、また有田へ移住後の石井家の様子など、さまざまな情報が明らかになりました。

みなさんの家庭にも、もしかしたら貴重な資料が眠っているかもしれません。それらから新たな歴史がわかることもあるかもしれませんし、家族のあり様が明らかになっていくことがあるかもしれません。

もしご家庭で古い書付や襖の下張りなどに使用された資料を発見されたらぜひ、有田町歴史民俗資料館へもお知らせください。

古文書教室 開催中

～くずし字を
読んでみませんか～

ところで、前ページでは新発見の古文書について紹介しましたが、有田町歴史民俗資料館では現在、生涯学習課・健康福祉課との共催で、月に一回ずつ古文書教室（初級・中級の二クラス）を開催しています。

会場は生涯学習センターで、毎月第一月曜日が初級クラス、第二水曜日が中級クラスです。講師はそれぞれ蒲地豊先生(赤絵町在住)と、前山博先生(伊万里市在住)です。

初級クラスでは、昨年から九州大学所蔵の松垣文庫の資料である「平松儀右衛門日記」を読んでいます。元治2年（1865）、唐津の商人であった平松儀右衛門という人が、仲間を募ってその年の3月に開催された長崎のおくんち見物に出かける際、伊万里や有田、武雄温泉や嬉野温泉などを通っていますが、その折に見聞したことを詳細に書き綴っています。

3月11日に唐津を出発した一行は、伊万里から宮野を経由して12日に有田の石場に到着しています。当時は自由に入れなかったと思われる石場を見学し、石を打ちこがす音がこだまして「誠に身の毛もよだつおもい」をしたと記しています。

その後、山を下って結構な家並みが続く道を通り、「焼き物扱う者、商う家、商う人の往来」が絶え間なくて繁盛している様子をうらやましく思ったとあります。そして、「御高札のうら手」、つまり現在の札の辻あたりにあった宿、永楽屋に到着しています。この宿には二階に厠（トイレ）があって「遙に音聞こえて悪敷臭いもせず」と珍しがっています。

当時の有田の著名人であった久富与次兵衛や黙斎（川原善之助）らのことも書き記していて、幕末の有田の様子を鮮やかに甦らせてくれる資料です。

この旅はまだまだ続きます。興味を持たれた方は一度教室を覗いてみてください。



古文書教室（初級）の授業風景

佐賀大学との 協働による 資料保存事業

陶器市オートバイ宣伝隊
(昭和30年ごろ)

昨年から、佐賀大学文化教育学部の中村隆敏准教授を中心に、社会人学生の講義の一環として当館所蔵の古写真をデータベース化する作業を協働して進めています。題して「デジタルコンテンツ・クリエイター育成プログラム」で、佐賀大学地域貢献推進室（室長五十嵐勉氏）が主催する事業です。

当館には平成10年に開催した「1,000枚の写真が語る なつかしの有田」展（館報No.39参照）で収集したものを中心に、古写真資料が多数あります。平成10年前後に収集した資料に加え、その後に収集した古写真の保存活用に関して、佐賀大学から協働の申し出があり、それを受けての事業です。

昨年11月に学生ら一行7人が来館し、古写真を一枚ずつスキャナーで読み込み、その写真が持っている文字情報をパソコンに入力する作業を行いました。

それを大学へ持ち帰り、データベース化する作業を行い、このほど1月31日（土）に佐賀大学本庄キャンパスにある菱の実会館で、この事業に係る終了研究の公開審査が行われ、当館からも参加しました。

姉川明子さん、古賀恵美さん、君山千鶴さん、原口聡史さんらによるアーカイブス有田班のメンバーは、陶業、祭り、陶器市などのテーマ別、あるいは年代やキャプション内の文字による検索システムを作って発表されました。

13名の発表者の中で、残念ながら最優秀賞は逃しましたが、君山さんが佐賀大学社会貢献理事賞、原口さんが佐賀大学eラーニングスタジオ賞を受賞されました。これらは未完成ということで、まだまだ手を加える部分は多々あるということでしたが、多才な検索機能は利用者にとって便宜を図れるのではないのでしょうか。

近い将来、当館での運用が叶うならば、例えば『有田皿山写真館～近代デジタルライブラリー（仮称）』とでも名付けて、館を訪れる方々に大いに活用していただくことができるのではないかと思います。

「目は口ほどにものを言う」といいます。一枚の写真が、時として長い文章よりも多くのことを語りかけてくれることもあります。今後、佐賀大学のご協力をいただきながら、有田皿山の近代史をわかりやすく、みなさまにお伝えできればと思っています。

町屋で昔話を聞く会 開催しました

一年のうちで一番の寒さを体感する季節となった1月17日(土)に、焼き物商社の鷹巣瑞光堂・本幸平店の座敷を会場に、昔話を聞く会を開催しました。

これは、有田町公民館と当館の共催で実施したもので、今回で2回目となります。障子を開けると中庭が広がり、そこには臘梅の花が馥郁と咲き誇っていました。



お話を聞く子ども達

表通りからそれを見ることができないのが残念なくらい、とてもきれいな色をしていました。

お話をさせていただいたのは、前回と同じくお話ボランティア「ひこう船」のメンバーである八尋典子さん、橋

口由紀子さん、林洋子さんの三人。

まず、公民館のキッズチャレンジ教室の受講生21人とその保護者7人の面々は、泉山の資料館を見学した後、石場や大いちょうなど有田内山地区を散策しながら会場へと向かいました。

鷹巣さんの座敷では、火鉢に炭を燃やして暖をとり、プロジェクターとパソコンを使った絵を見ながら、お話をさせていただきました。昔ながらの畳と襖の会場と、近代的な機器を駆使しての絶妙なバランスで、「黒髪山の大蛇退治」や「十二支」の話を、巧みな有田弁で語っていただき、さらに「花さき山」や「あらしのよるに」と続けました。

最後は、部屋一杯に広げての絵本カルタ取り。子どもたちは寒さを忘れてお話に夢中になっていました。

有田内山地区には江戸時代から続く白壁土蔵造の伝統的な町屋が数多く残っています。ところが、なかなか内部の様子を見る機会はありません。今回、鷹巣さんのご厚意で広い座敷を使わせて



大賑わいの絵本カルタ取り

いただき、子どもたちと昔話を楽しむことができました。また、忙しい中に読み聞かせを快諾いただいたひこう船の方々にも感謝申し上げます。

有田人の書籍

『佐賀藩研究論攷

池田史郎著作集』

このほど、近世の有田皿山の研究者として生前、多くの著作を残された故池田史郎氏の著作集が出版されました。

池田氏は1916年生まれ。京都帝国大学文学部史学科(国史学専攻)を卒業後、福井県立福井高等女学校、佐賀県立武雄中学校、佐賀県立佐賀高等学校、佐賀西高等学校などで43年にわたり教鞭をとられました。その傍ら、佐賀市文化財保護審議会委員や葉隠研究会副会長などを歴任され、有田町では昭和60年から刊行が始まった「有田町史 政治社会編I」を執筆されました。

また、佐賀県立図書館所蔵の「有田皿山代官旧記覚書」の翻刻を手がけられています。原本は非常に読みづらいものですが、江戸時代中期の有田皿山に関する貴重な資料です。

今回出版された著作集には、有田焼生産とそれに従事する人々の生活を「皿山代官旧記覚書」を中心に分析、解明した論考が収録されています。

このほかに佐賀藩の仕組みや葉隠の世界に関するものなど、広範にわたる佐賀藩の基礎研究の成果である論考の数々が、共に研究した方や教え子の方々によって集大成された労作です。

有田皿山の近世史研究には欠かせない必読の書です。是非書店でお求めいただき、ご一読ください。



・A5版 320頁

・出版社 出門堂
(福博印刷株式会社
文化事業推進室)

・定価
15,000円

季刊『皿山』

通巻81号(平成21年3月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185